

屈辱感をバネにする

—自己効力感, 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求, 達成動機, Locus of Control,
自尊感情, 原因帰属からの探索的検討—

薊 理津子*

要 約

本研究では、屈辱感が社会適応的行動を促進する、云わば、自己を向上させる行動を導くための調整変数を検討することを目的とした。調整変数として、自己効力感、Locus of Control、達成動機、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求、自尊感情、原因帰属を取り上げた。先行研究に基づき、自己が他者よりも劣位に置かれた場面に焦点をあて、大学生にとって想起しやすいゼミのレポートの評価というシナリオを設定して検討した。結果、賞賛獲得欲求の低い者は屈辱感が高まると、自己を向上させる行動が促された。また、内的帰属の低い者は屈辱感が高まると、自己を向上させる行動が促されることが示された。以上より、自己が他者よりも劣位に置かれるという場面において、屈辱感が自己向上を動機づけるよう導く調整変数として、賞賛獲得欲求と内的帰属が見出された。

キーワード：屈辱感, 原因帰属, 自己効力感, 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求, 達成動機, Locus of control, 自尊感情

問 題

屈辱感 (humiliation) は、ネガティブな自己意識的感情の一つであり、他者によって低い立場に追いやられたという感覚が生じる非常に強烈な感情と定義されている (Elison & Harter, 2007)。Gilbert & McGuire (1998) は、屈辱感を感じた人間は他者によって自分が傷つけられたと強く認識をするので、憎しみの感情が生じやすく、自分を傷つけた他者への報復を望み、攻撃的になりやすいと指摘している。本邦においても、屈辱感について海外の知見とほぼ一致する特徴が得られている。薊 (2006) は屈辱感を感じるほど、怒りや逃避行動が高まり、他者への責任の外在化が生じやすいこと、また、薊 (2010) は他者に

迷惑を掛けて注意・叱責を受けるという場面において、屈辱感が他者との関係修復を阻害することを明らかにしている。以上より、屈辱感は社会不適応的に働くことが示唆されている。しかし、屈辱感とは社会不適応的にしか働かないのだろうか。屈辱感の経験を教訓として自身を成長させる、謂わば、屈辱感をバネにしたエピソードをしばしば仄聞する。例えば、田中 (2017) は、リオ五輪の出場を逃した選手が、その経験を自身のパフォーマンスを向上させるための糧とし、より一層トレーニングに取り組んだ結果、大会で連覇を果たしたことを報告している。このような形で屈辱感に動機づけられた行動は、社会的に受容される行動であり、社会適応的といえよう。そこで、本研究では、屈辱感を感じることによって、社会適応的行動が促される可能性を検討することを目的とする。また、本研究で検討する社会適応的行動とは、社会規範に抵触せず、社会的に受容される形

2018年11月30日受付

* 江戸川大学 社会学部人間心理学科専任講師 社会心理学

で、将来的に自己を向上させるであろう行動とする。つまり、他者を害する方略を取って自己を向上させるといった社会規範を逸脱する行動は該当しない。

では、どのような場合に、屈辱感は社会適応的行動を促すのであろうか。進化論的観点から、屈辱感は優位個体の地位を奪取しようと動機付け、劣位個体が生存や繁殖上のメリットを得るよう役立っていたという (Fessler, 2007)。つまり、屈辱感は優劣が示される場面において社会適応的に機能する可能性が考えられる。しかし、優劣が示される場面であれば、屈辱感が社会適応的に働くとは、単純に考えにくい。何故ならば、その場面に対して良い結果が期待できる場合は自己制御を試みようとする努力を続けるが、良い結果が期待できない場合は逃避が生じるためである (Carver & Schier, 1981)。この自己制御を高める要因として、個人がある状況への対処行動を効果的に遂行できると考える認知である自己効力感が指摘されている (Bandura, 1995)。本研究は屈辱感が社会適応的行動を促進するための調整変数として自己効力感を仮定する。

また、本研究では自己効力感以外にも、屈辱感が社会適応的行動を促進するための調整変数として、自己制御や達成行動に関わる個人特性である以下4つについても検討する。まず、1つ目に、自分自身の行動と、それに随伴する結果を統制できるという信念である Locus of Control (LOC: Rotter, 1966) である。仮に、自己が劣位に置かれた場合、自身の行動によって結果が変わるという信念がなければ、自己を向上させるような行動を取る可能性は低だろう。2つ目に、達成動機である。Murray (1964 八木訳 1966) は達成動機を、困難なことを成し遂げること、他人と競争し、他人よりも良いパフォーマンスを修めるよう促す動機と考えた。優劣が示される場面で自己が劣位に置かれた場合、達成動機が高い者ほど、他者よりも良いパフォーマンスを求めると予想される。3つ目に、他者からの肯定的な評価を獲得しようとする賞賛獲得欲求と、他者からの否定的な評価を回避しようとする拒否回避欲求 (小島・太

田・菅原, 2003) についても扱う。なぜならば、自己の優劣が明示される場面は、他者に与える自己イメージに影響を及ぼす。優劣が示される場面において、自己が他者よりも劣位に置かれた場合、自己の能力の低さを他者に印象づけてしまうため、賞賛獲得欲求が高い者は肯定的評価を得るための行動を取ると考えられ、また、拒否回避欲求が高い者は自己の否定的印象を払拭するための行動を取ると考えられる。ゆえに、自己呈示に関わる賞賛獲得欲求と拒否回避欲求を取り上げる。最後に、自己効力感の近接概念であり、自身に対する肯定的な捉え方という点で類似している自尊心 (安達, 2016) についても検討することとした。

さらに、本研究では個人特性だけでなく、原因帰属についても検討する。Weiner et al. (1971) は、不安定的で統制可能な努力に帰属すると、努力によって結果が変わると考え、達成行動が促進されると示唆している。物事の原因を何に帰属するかによって変化するのは行動だけではなく、生起する感情も異なる (Weiner, 2006 速水・唐沢監訳 2007)。加えて、自己意識的感情の研究では、自己のどの側面に帰属するかによって、生起する感情に相違があることが指摘されている (Tracy & Robins, 2007)。例えば、努力のような内的で変化させることが可能な自己の特定の側面に帰属すると罪悪感 (guilt) が生じる (Tracy & Robins, 2004, 2007)。また、屈辱感は外的帰属との関連性が指摘されている (Gilbert & McGuire, 1998)。よって、原因帰属が、屈辱感が社会適応的行動を促進するための調整変数となる可能性についても検討する。

本研究では、自己が他者よりも劣位に置かれた場면을対象として検討を進める。しかし、仮に自己が他者よりも劣位に置かれたとしても、どの程度の優劣の差であるかによって、屈辱感の生起は異なることが示されている。Kerr, Wilson, Bowling, & Sheahan (2005) は日本女子フィールドホッケー選手を対象として、試合の結果による情動経験の差異を検討している。その結果、相手チームに負けた場合でも、試合内容によっては試合前後での屈辱感の生起の程度に差は見られな

いこと、また、大敗した試合では屈辱感がより強く生起されたことが示された。よって、本研究では場面想定法を用い、他者が自分よりも圧倒的に優れたパフォーマンスを示すシナリオと、他者が自分よりも僅かに優れたパフォーマンスを示すシナリオの2つを設定する。

以上より、本研究の目的は、屈辱感が社会適応的行動を促進させるための調整変数を検討することである。調整変数として、自己効力感、LOC、達成動機、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求、自尊感情、原因帰属を取り上げる。

方法

調査対象者

インフォームドコンセントを行った上で、関東圏の大学生 333 名（男性 110 名、女性 220 名、不明 3 名）が調査に参加した。平均年齢は 19.79 (SD=1.20) であった。

手続き

大学の講義時間中に質問紙を配布し、その場で回収した。

質問紙の構成

他者よりも劣位に立たされたシナリオを提示し、シナリオに対して原因帰属、屈辱感を含む自己意識的感情、心理的反応について評定を求めた。その他に個人特性を尋ねた。シナリオは2種類作成され、いずれかを調査対象者にランダムに割り当てた。

シナリオ

本研究の対象は大学生であったため、自己意識的感情と原因帰属について検討した Harel & Hess (2008) で使用されていた、大学生にとって想起しやすいレポートの成績を扱った。また、薊 (2008) では、友人に対して屈辱感を感じることが多いと示されていることから、ゼミ課題であるレポートの評価が友人よりも低いという場面を設定した。このとき、どの程度評価に差があったかを操作することで、友人と自分との評価に大きな差がある場面（以下、大差場面とする）と僅かな差がある場面（以下、僅差場面とする）を作

成した。Table 1 に大差場面の例を示す。僅差場面では下線部の「3点」を「8点」に、「大きく」を「わずかに」と変更した。これらの部分以外は、両場面で同一の文章であった。

Table 1 大差場面のシナリオ

あなたはゼミでレポートを提出しました。翌週、採点されたレポートが返却されました。あなたの点数は 10 点中、3点でした。あなたは同じゼミの友人と 2 人で、返却されたレポートについて話しました。お互いに、レポートの評価を言い合ったところ、友人の点数は 9 点で、あなたを大きく上回っていました。

原因帰属 上記にあるシナリオの説明で述べた通り、本研究のシナリオは Hareli & Hess (2008) を参考にした。Hareli & Hess (2008) は、大学のゼミのレポートで低い評価を受けたという場面を設定し、Weiner (1986) に基づき原因帰属を操作している。本研究では Hareli & Hess (2008) による原因帰属の操作を参考に、所在（内的／外的）と安定性（安定／不安定）、統制可能性（可能／不可能）を組み合わせた 8 項目を作成した。具体的には、「普段からの努力不足（内的／安定的／統制可能）」「能力不足（内的／安定的／統制不可能）」「レポートのための努力不足（内的／不安定的／統制可能）」「体調不良（内的／不安定的／統制不可能）」「このゼミの担当教員の課題はいつも難しい（外的／安定的／統制可能）」「例年、ゼミは難しい（外的／安定的／統制不可能）」「レポートに関する周囲からの情報がよくない（外的／不安定的／統制可能）」「運の悪さ（外的／不安定的／統制不可能）」であった。レポートの結果の原因をどのように考えるかについて、「全くあてはまらない（1点）」から「非常にあてはまる（5点）」の 5 件法で評定を求めた。

自己意識的感情 薊 (2009, 2010) による屈辱感、羞恥感、罪悪感を測定する項目から 23 項目（例：屈辱感を感じる）を利用し、5 件法で回答を求めた（屈辱感 $\alpha=.88$ 、羞恥感 $\alpha=.95$ 、罪悪感 $\alpha=.85$ ）。なお、羞恥感と罪悪感は、制御変数として用いるために測定した。

シナリオ提示後の心理的反応 シナリオ提示後の心理的反応を作成する上で、屈辱感は羞恥感や罪悪感と共に検討されてきた (e.g., 薊, 2010) ことをふまえ、恥 (shame) と罪悪感を感じた際の行動傾向 (e.g., Breugelmans & Poortinga, 2006) を参考にしつつ、Fessler (2007) による劣位個体が優位個体の地位を奪取するという知見を確認できる項目を含むようにした。加えて、本研究の目的を検討可能とするために、優れたパフォーマンスを示した友人よりも、より良いパフォーマンスを示すよう、社会的に望ましい形で自己向上に取り組むことを測定できる項目 (例: 「友人よりも良い成績を取るよう努力する」) を含むようにした。最終的に、シナリオ提示後に生じうる心理的反応として 18 項目を作成した (Table 2)。「全くあてはまらない (1 点)」から「非常にあてはまる (5 点)」の 5 件法で評定を求めた。

個人特性 (a) ~ (e) の個人特性を測定した。

(a) **自己効力感** 自己効力感には、課題や場面によらず一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感と、課題や場面に特異的に働く自己効力感の 2 つの水準がある (Bandura, 1977) ことから、本研究では自己効力感を前者の特性レ

ベルものと、後者の特定領域の自己効力感を区別して測定した。まず、特性レベルの自己効力感については、Sherer et al. (1982) が作成した自己効力感尺度の邦訳版である特性自己効力感尺度 (成田他, 1995) を使用した。この尺度は 1 因子構造であり、合計 23 項目 (例: 自分が立てた計画はうまくできる自信がある) から成る。「そう思わない (1 点)」から「そう思う (5 点)」の 5 件法で評定を求めた ($\alpha=.85$)。

特定領域に対する自己効力感については、本研究のシナリオで取り上げた勉強という領域に限定した自己効力感 (以降、勉強に対する自己効力感) を測定するために、自己効力感の構成概念に基づき、次の 4 項目を作成した。項目は、「人並み以上に、勉強ができると思う」「勉強に関しては、他の人よりも良い点数が取れると思う」「勉強に関しては、持っている力を思う存分に発揮できると思う」「今ある最大限の力を出し切れると思う」であった。「全くあてはまらない (1 点)」から「非常にあてはまる (5 点)」の 5 件法で評定を求めた。

(b) **Locus of Control** 鎌原・樋口・清水 (1982) の Locus of Control 尺度を用いた。この尺度は自分自身の行動と、それに随伴する結果を統制で

Table 2 シナリオ提示後の心理的反応についての因子分析の結果

項目	F1	F2	F3	F4
【F1: 妨害 ($\alpha=.87, M=1.35, SD=0.58$)】				
友人にゼミの情報が回らないようにする	.99	-.02	-.07	-.08
友人にゼミの嘘の連絡をする	.92	-.05	-.10	-.07
その友人との距離を置く	.82	.00	.06	.05
友人の成績が落ちるよう、邪魔をする	.63	.13	.08	.06
友人にノートや資料のコピーを頼まれても断る	.50	-.03	.11	.16
【F2: 態度維持 ($\alpha=.93, M=3.05, SD=1.18$)】				
特に行動を変えない	-.04	.91	-.01	.01
何もしない	.03	.89	-.05	.00
何も変わらない	.02	.87	.01	-.04
【F3: 自己向上 ($\alpha=.83, M=3.61, SD=0.82$)】				
友人よりも良い成績を取るよう努力する	.07	.07	.94	.03
次は友人には負けたくないと思う	-.01	.04	.81	.00
良い成績を目指して努力する	-.06	-.15	.60	-.05
このゼミにより真剣に取り組む	.02	-.25	.48	-.07
【F4: 学業意欲低下 ($r=.70, p<.001, M=2.39, SD=0.94$)】				
このゼミに対する関心が低くなる	.02	-.06	-.06	.89
やる気をなくす	.03	.03	.03	.77
因子間相関	I	.07	-.04	.27
	II		-.56	.31
	III			-.06

きるという信念を測定するもので、1因子構造であり、18項目（例：「あなたは、努力すれば、りっぱな人間になれると思いますか」）で構成されている。「そう思わない（1点）」から「そう思う（4点）」の4件法で評定を求めた（ $\alpha=.68$ ）。

(c) **達成動機** 堀野（1987）の達成動機測定尺度を用いた。この尺度は社会的・文化的に価値があることを成し遂げようとする競争的達成動機（10項目、例：「ものごとは他の人よりうまくやりたい」）と、個人が価値があると思うことを成し遂げようとする自己充實的達成動機（13項目、例：「いつも何か目標をもっていたい」）の2因子、23項目から構成されている。「全然あてはまらない（1点）」から「非常によくあてはまる（7点）」の7件法で評定を求めた（競争的達成動機 $\alpha=.83$ 、自己充實的達成動機 $\alpha=.86$ ）。

(d) **賞賛獲得欲求・拒否回避欲求** 小島・太田・菅原（2003）が作成した賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度を使用した。この尺度は自己呈示に関わる欲求を測定するもので、周囲から肯定的評価を得ようとする傾向の賞賛獲得欲求（9項目、例：「人と話すときにはできるだけ自分の存在をアピールしたい」）、周囲から否定的評価を回避しようとする傾向の拒否回避欲求（9項目、例：「意見を言うとき、みんなに反対されないかと気になる」）の2つの下位尺度、18項目から構成されている。「全くあてはまらない（1点）」から「とてもよくあてはまる（5点）」の5件法で評価するよう求めた。

(e) **自尊心感情** Rosenberg（1965）が作成した、Rosenberg Self-Esteem Scaleの日本語版（山本・松井・山成、1982）10項目（例：「自分に対して肯定的である」）を用いた。「あてはまらない（1点）」から「あてはまる（5点）」の5件法で評価するよう求めた。

結 果

変数の作成

シナリオ提示後の心理的反応 シナリオ提示後の心理的反応に関する18項目について因子分析

（主因子法、promax回転）を行い、全ての因子に負荷量の絶対値が.35未満の項目もしくは複数の因子に負荷量の絶対値が.35以上の項目であった4項目を分析から除外した。最終的に、固有値の減衰状況（1.40, 3.50, 1.59, 1.06…）と因子の解釈可能性から4因子が得られた（Table 2）。第1因子は「友人にゼミの情報が回らないようにする」「友人にゼミの嘘の連絡をする」など5項目であり、友人を妨害する内容と解釈できることから、「妨害」因子と命名した。第2因子は「特に行動を変えない」「何もしない」など3項目であり、シナリオ前後で態度を変化させない内容と解釈できることから、「態度維持」因子と命名した。第3因子は「友人よりも良い成績を取るよう努力する」「次は友人には負けたくないと思う」など4項目であり、今後の努力など自分自身の向上に努める内容と解釈できることから、「自己向上」因子と命名した。第4因子は「このゼミに対する関心が低くなる」「やる気をなくす」の2項目であり、ゼミに対する取り組みについて意欲が低下した内容と解釈できることから、「学業意欲低下」因子と命名した。第1因子から第3因子までは α 係数を算出したところ、.83～.93と十分な値が得られた。第4因子は2項目であったため相関係数を算出した結果、 $r=.70$ であり、0.1%水準で有意であった。各因子で平均値を算出し、合成得点として以降の分析に使用した。

勉学に対する自己効力感 勉学に対する自己効力感を測定した4項目について主成分分析を行った結果、第1主成分のみが抽出され、寄与率は68.69%であり、負荷量は.68～.89であった。 α 係数は0.84であり、十分な信頼性が確認された。以降の分析では、平均値を算出した合成得点を使用した。

原因帰属 原因帰属に関する8項目について因子分析（主因子法、promax回転）を行い、全ての因子に負荷量の絶対値が.35未満の項目であった1項目を分析から除外した。最終的に、固有値の減衰状況（2.74, 1.42, 0.87, …）と因子の解釈可能性から2因子が得られた（Table 3）。第1因子は「例年、この科目は難しい」「担当教員が作る問題はいつも難しい」など5項目であり、自分以

Table 3 原因帰属に関する因子分析の結果

項目	F1	F2
【F1: 外的帰属 ($\alpha=.78, M=2.38, SD=0.79$)】		
例年、この科目は難しい	.89	.10
担当教員が作る問題はいつも難しい	.80	.08
テストに関する周囲からの不適切な情報	.67	-.08
体調不良	.50	-.06
運の悪さ	.37	-.11
【F2: 内的帰属 ($r=.41, p<.001, M=4.24, SD=0.72$)】		
テストのための努力不足	-.12	.79
普段からの努力不足	.05	.51
因子間相関	F1	-.04

Table 4 自己意識的感情とシナリオ提示後の心理的反応, 原因帰属, 個人特性の平均値と標準偏差, 性差

	男性		女性		F (1,279)
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
自己意識的感情					
屈辱感	2.77	1.04	2.96	0.85	2.65
羞恥感	2.95	1.13	3.08	1.01	1.05
罪悪感	2.75	0.92	2.84	0.77	0.69
シナリオ提示後の心理的反応					
妨害	1.32	0.54	1.33	0.48	0.01
態度維持	3.18	1.23	2.97	1.13	2.10
自己向上	3.38	0.82	3.77	0.80	13.97***
学業意欲低下	2.24	0.93	2.43	0.92	2.67
原因帰属					
外的帰属	2.28	0.87	2.41	0.74	1.83
内的帰属	4.31	0.75	4.25	0.64	0.58
個人特性					
特性自己効力感	2.92	0.53	2.88	0.50	0.21
勉学に対する自己効力感	2.73	0.97	2.53	0.73	3.63
LOC	2.64	0.37	2.64	0.31	0.01
拒否回避欲求	3.47	0.72	3.65	0.61	4.26
賞賛獲得欲求	3.36	0.68	3.06	0.63	13.35***
競争的達成動機	5.18	1.04	4.76	0.76	14.15***
自己充實的達成動機	5.34	0.74	5.30	0.79	0.21
自尊感情	2.85	0.64	2.66	0.60	6.26

*** $p<.001$

外に原因があると考えられる項目が1つの因子にまとまっていることから、「外的帰属」因子と命名した。第2因子は「テストのための努力不足」「普段からの努力不足」の2項目であり、自分自身の行動に原因があると考えられる内容であることから、「内的帰属」因子と命名した。第1因子について、 α 係数を算出したところ、.78と十分な値が得られた。第2因子は2項目であったため相関係数を算出した結果、 $r=.41$ であり、0.1%水準で有意であった。各因子で平均値を算出し、この値を合成得点として以降の分析に使用した。

性差の検討

性別を独立変数とし、自己意識的感情、シナリオ提示後の心理的反応、原因帰属、個人特性を従属変数とした多変量分散分析を行った。結果、有意な性の効果が認められた ($\lambda (17/263) = 0.79, p < .001$)。従属変数とした変数について、性別ごとの平均値と標準偏差、および性差の結果をTable 4に示す。自己向上、賞賛獲得欲求、競争的達成動機についての有意な性差が認められた。

シナリオ間の差異の検討

シナリオ提示後に回答を求めた変数について、

Table 5 自己意識的感情, シナリオ提示後の心理的反応, 原因帰属の平均値と標準偏差, シナリオ間の差

	僅差場面 (N=157),		大差場面 (N=176)		F (1,315)
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
自己意識的感情					
屈辱感	2.57	0.86	3.18	0.86	39.05***
羞恥感	2.57	0.98	3.42	0.93	62.83***
罪悪感	2.49	0.78	3.05	0.72	44.49***
シナリオ提示後の心理的反応					
妨害	1.34	0.57	1.35	0.54	0.01
態度維持	3.33	1.18	2.79	1.12	17.21***
自己向上	3.54	0.84	3.66	0.82	1.82
学業意欲低下	2.20	0.90	2.53	0.94	9.97**
原因帰属					
外的帰属	2.27	0.76	2.47	0.81	4.78
内的帰属	4.15	0.77	4.34	0.62	5.82

*** $p < .001$

シナリオ間の差異を検討するために、独立変数をシナリオ、従属変数を自己意識的感情、シナリオ提示後の心理的反応、原因帰属とした多変量分散分析を行った。結果、有意なシナリオの効果が認められた ($\lambda (9/307) = 0.75, p < .001$)。従属変数とした変数について、シナリオごとの平均値と標準偏差、およびシナリオ間の差の結果を Table 5 に示す。屈辱感、羞恥感、罪悪感、態度維持、学業意欲低下については、場面間に有意な得点の差が認められた。

調整変数の検討

1. 個人特性についての検討

基準変数をシナリオ提示後の心理的反応である「妨害」「態度維持」「自己向上」「学業意欲低下」、説明変数を、シナリオ (0= 僅差, 1= 大差), 性別 (0= 女性, 1= 男性), 自己意識的感情 (屈辱感, 羞恥感, 罪悪感), 個人特性 (拒否回避欲求, 賞賛獲得欲求, 特性自己効力感, 勉学に対する自己効力感, LOC 競争的達成動機, 自己充實的達成動機, 自尊感情) として階層的重回帰分析を行った。また、分析は、個人特性ごとで分析を行い、多重共線性を避けるために説明変数の内の量的変数についてセンタリングを行った。シナリオ, 性別, 自己意識的感情の羞恥感と罪悪感とは屈辱感と相関が高いため、共変数として分析に加えた。第 1 ステップとしてシナリオ, 性別, 自己意識的感情, 個人特性, 第 2 ステップで屈辱感, 個人特性

の 1 次の交互作用項を投入した。交互作用項が有意もしくは有意傾向であった場合、交互作用の性質を検討するために、Cohen & Cohen (1983) に基づき、平均 \pm 1SD の値を有意な交互作用が得られた変数に代入した結果を図示し、Aiken & West (1991) にしたがって、交互作用の詳細について Simple Slope Analysis を行い検討した。

「妨害」を基準変数とした分析 Table 6 に「妨害」を基準変数とした階層的重回帰分析の結果を示す。「妨害」については、全ての分析において、罪悪感の主効果が有意となり、自尊感情を投入した分析においては屈辱感の主効果が有意傾向であった。各個人特性の主効果については、特性自己効力感, LOC, 自己充實的達成動機を投入した際に有意であった。また、全ての分析において有意な R^2 の変化量は示されなかった。

「態度維持」を基準変数とした分析 Table 7 に「態度維持」を基準変数とした階層的重回帰分析の結果を示す。「態度維持」については、全ての分析において、シナリオの有意な主効果が見られ、また、賞賛獲得欲求, 競争的達成動機, 自尊感情を投入した分析において、性別の主効果が有意傾向であった。さらに、自己充實的達成動機を投入した分析を除き、全ての分析において、罪悪感の有意な主効果が得られた。屈辱感の主効果は、自己充實的達成動機を投入した分析において、有意傾向であった。個人特性の主効果については、拒否回避欲求と競争的達成動機を除いて、有意な結

Table 6 「妨害」を基準変数とした階層的重回帰分析の結果

	個人特性							
	特性自己 効力感	勉学に 対する 自己効力感	LOC	拒否回避 欲求	賞賛獲得 欲求	競争的 達成動機	自己充實的 達成動機	自尊感情
シナリオ (0= 僅差, 1= 大差)	-.07	-.05	-.07	-.06	-.06	-.03	-.03	-.05
性別 (0= 女性, 1= 男性)	.06	.04	.04	.05	.03	.03	.02	.05
罪悪感	.21*	.22**	.21*	.22**	.21*	.22**	.24**	.22**
羞恥感	-.08	-.08	-.08	-.08	-.07	-.10	-.10	-.08
屈辱感	.13	.12	.14	.14	.11	.13	.14	.15 [†]
各個人特性	-.12*	.07	-.14*	-.02	.07	.04	-.11*	.08
R^2	.08***	.07***	.08***	.06**	.07**	.06**	.08***	.07***
各個人特性×屈辱感	.08	.00	.01	-.04	.03	-.01	.00	.08
R^2	.08	.07	.08	.07	.07	.06	.08	.08
ΔR^2	.01	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.01
F	.01	.00	.04	.59	.32	.07	.01	1.95

[†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 7 「態度維持」を基準変数とした階層的重回帰分析の結果

	個人特性							
	特性自己 効力感	勉学に 対する 自己効力感	LOC	拒否回避 欲求	賞賛獲得 欲求	競争的 達成動機	自己充實的 達成動機	自尊感情
シナリオ (0= 僅差, 1= 大差)	-.19***	-.18**	-.20***	-.17**	-.17**	-.18**	-.17**	-.17**
性別 (0= 女性, 1= 男性)	.10	.10	.07	.08	.11 [†]	.11 [†]	.08	.09 [†]
罪悪感	-.15*	-.20*	-.19*	-.19*	-.16*	-.20*	-.12	-.19*
羞恥感	.02	.03	.02	.05	.05	.03	.07	.03
屈辱感	-.10	-.01	-.05	-.07	-.05	-.03	-.15 [†]	-.07
各個人特性	-.40***	-.18**	-.24***	.01	-.16**	-.06	-.27***	-.13*
R^2	.26***	.13***	.17***	.10***	.12***	.11***	.18***	.12***
各個人特性×屈辱感	-.01	.05	-.04	.06	.08	-.09 [†]	.02	.05
R^2	.26	.14	.17	.10	.13	.12	.18	.12
ΔR^2	.00	.00	.00	.00	.01	.01	.00	.00
F	.06	.81	.70	1.21	1.88	2.82 [†]	.19	.76

[†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

果が得られた。 R^2 の変化量は競争的達成動機と屈辱感の交互作用を投入したときのみ有意傾向となった。交互作用の性質を検討するために、平均±1SDの値を競争的達成動機と屈辱感に代入した結果をFigure 1に示す。また、Simple Slope Analysisを行い検討した。結果、競争的達成動機が高い場合も、競争的達成動機が低い場合においても、屈辱感の高低による影響は有意とならなかった($B = -0.11$, $t = -1.05$, ns ; $B = 0.08$, $t = 0.92$, ns)。

「自己向上」を基準変数とした分析 Table 8に「自己向上」を基準変数とした階層的重回帰分

析の結果を示す。「自己向上」については、全ての分析において、性別の主効果が有意となった。罪悪感の主効果は、特性自己効力感、勉学に対する自己効力感、拒否回避欲求、競争的達成動機、自尊感情、LOCを投入した分析において有意もしくは有意傾向となった。屈辱感の主効果は、特性自己効力感、拒否回避欲求、自己充實的達成動機、自尊感情、LOCを投入した分析において有意もしくは有意傾向となった。各個人特性の主効果については、特性自己効力感、勉学に対する自己効力感、LOC、競争的達成動機、自己充實的

Table 8 「自己向上」を基準変数とした階層的重回帰分析の結果

	個人特性							
	特性自己効力感	勉学に対する自己効力感	LOC	拒否回避欲求	賞賛獲得欲求	競争的達成動機	自己充實的達成動機	自尊感情
シナリオ (0= 僅差, 1= 大差)								
性別 (0= 女性, 1= 男性)								
罪悪感								
羞恥感								
屈辱感								
各個人特性								
R^2								
各個人特性×屈辱感								
R^2								
ΔR^2								
F								

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

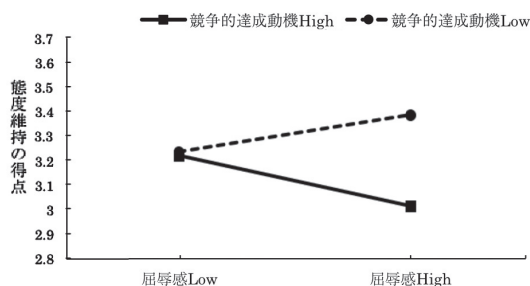


Figure 1 「態度維持」における競争的達成動機と屈辱感の交互作用

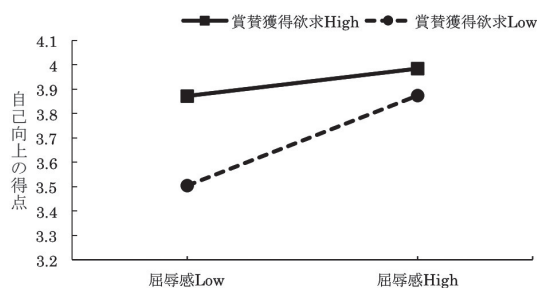


Figure 2 「自己向上」における賞賛獲得欲求と屈辱感の交互作用

達成動機、自尊感情を投入した際に、有意もしくは有意傾向となった。 R^2 の変化量は賞賛獲得欲求と屈辱感の交互作用を投入したときのみ有意傾向となった。

交互作用の性質を検討するために、平均±1SDの値を賞賛獲得欲求と屈辱感に代入した結

果を Figure 2 に示す。また、Simple Slope Analysis を行い検討した。結果、賞賛獲得欲求が高い場合には屈辱感の高低による影響は有意とならなかったが ($B=0.06, t=0.74, ns$)、賞賛獲得欲求が低い場合に、屈辱感の高低による影響は有意となった ($B=0.20, t=2.63, p<.01$)。

「学業意欲低下」を基準変数とした分析 Table 9 に「学業意欲低下」を基準変数とした階層的重回帰分析の結果を示す。「学業意欲低下」については、全ての分析において、屈辱感の有意な主効果が見られた。また、特性自己効力感、勉学に対する自己効力感、拒否回避欲求、自己充實的達成動機、自尊感情を投入した分析において、シナリオの主効果が有意傾向となった。個人特性については、拒否回避欲求を除き、有意な主効果が得られた。

R^2 の変化量は LOC と屈辱感の交互作用を投入したときのみ有意傾向となった。交互作用の性質を検討するために、平均±1SDの値を LOC と屈辱感に代入した結果を Figure 3 に示す。また、Simple Slope Analysis を行い検討した。結果、LOC が高い場合には屈辱感の高低による影響は有意とならなかったが ($B=0.14, t=0.86, ns$)、LOC が低い場合に、屈辱感の高低による影響は有意となった ($B=0.39, t=2.44, p<.05$)。

Table 9 「学業意欲低下」を基準変数とした階層的重回帰分析の結果

	個人特性							
	特性自己効力感	勉学に対する自己効力感	LOC	拒否回避欲求	賞賛獲得欲求	競争的達成動機	自己充實的達成動機	自尊感情
シナリオ (0= 僅差, 1= 大差)	.09 [†]	.10 [†]	.09	.11 [†]	.10	.10	.11 [†]	.10 [†]
性別 (0= 女性, 1= 男性)	-.07	-.06	-.08	-.07	-.05	-.04	-.09	-.07
罪悪感	.06	.04	.05	.04	.06	.02	.08	.04
羞恥感	-.09	-.09	-.06	-.09	-.08	-.09	-.07	-.09
屈辱感	.26**	.32***	.26**	.29***	.30***	.36***	.25**	.29***
各個人特性	-.32***	-.10 [†]	-.17**	.05	-.11 [†]	-.11 [†]	-.15**	-.10 [†]
R ²	.21	.12***	.14***	.11***	.11***	.12***	.13***	.12***
各個人特性×屈辱感	-.05	-.09	-.13*	.05	.04	-.08	-.04	-.08
R ²	.21***	.12	.15	.11	.12	.13	.13	.12
ΔR ²	.00	.01	.02	.00	.00	.01	.00	.01
F	.88	2.58	5.76*	.72	.44	2.34	.45	2.38

[†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

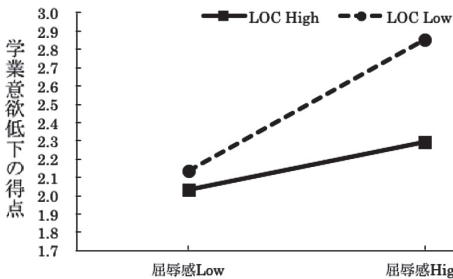


Figure 3 「学業意欲低下」におけるLOCと屈辱感の交互作用

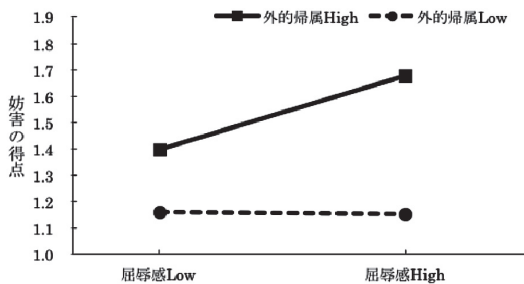


Figure 4 「妨害」における外的帰属と屈辱感の交互作用

2. 原因帰属についての検討

基基準変数をシナリオ提示後の心理的反応である「妨害」「態度維持」「自己向上」「学業意欲低下」, 説明変数をシナリオ (0= 僅差, 1= 大差), 性別 (0= 女性, 1= 男性), 自己意識的感情 (屈辱感, 羞恥感, 罪悪感), 原因帰属 (外的帰属, 内的帰属) として階層的重回帰分析を行った。また, 個人特性に

関する分析と同様に, 多重共線性を避けるために説明変数の内の量的変数についてセンタリングを行い, シナリオ, 性別, 自己意識的感情の羞恥感と罪悪感は共変数として分析に加えた。第1ステップとしてシナリオ, 性別, 自己意識的感情, 原因帰属, 第2ステップで屈辱感と内的帰属, 屈辱感と外的帰属の一次の交互作用項, 第3ステップで屈辱感, 内的帰属, 外的帰属の2次の交互作用項を投入した。階層的重回帰分析の結果を Table 10 に示す。

上記の個人特性についての検討と同様, 交互作用項が有意であった場合, 交互作用の性質を検討するために, Cohen & Cohen (1983) に基づき, 平均±1SDの値を有意な交互作用が得られた変数に代入した結果を図示し, Aiken & West (1991) にしたがって, 交互作用の詳細について Simple Slope Analysis を行い検討した。

「妨害」を基準変数とした分析「妨害」については, 罪悪感と外的帰属の主効果が有意であった。R²の変化量については, 外的帰属と屈辱感の交互作用が有意となった。交互作用の性質を検討するために, 平均±1SDの値を外的帰属と屈辱感に代入した結果を Figure 4 に示す。Simple Slope Analysis を行い検討した結果, 外的帰属が高い場合は屈辱感の高低による影響は有意となり ($B=0.15$, $t=3.80$, $p<.01$), 外的帰属が低い場合は,

Table 10 原因帰属に関する階層的重回帰分析の結果

説明変数	基準変数			
	妨害	態度維持	自己向上	学業意欲低下
シナリオ (0= 僅差, 1= 大差)	-.08	-.17**	-.07	.09
性別 (0= 女性, 1= 男性)	.07	.09†	-.19***	-.06
罪悪感	.17*	-.19*	.16*	.00
羞恥感	-.04	.08	.01	-.04
屈辱感	.09	-.08	.20*	.25**
外的帰属	.35***	.09	-.08	.25***
内的帰属	-.02	-.07	.17**	-.01
R^2	.18***	.11***	.19***	.17***
外的帰属×屈辱感	.13*	-.04	-.00	-.03
内的帰属×屈辱感	.02	.14*	-.13*	-.01
R^2	.20	.13	.20	.17
ΔR^2	.02	.02	.02	.00
F	3.30*	3.61*	3.20*	.21
外的帰属×内的帰属×屈辱感	.04	-.08	-.00	-.07
R^2	.20	.14	.20	.17
ΔR^2	.00	.00	.00	.00
F	.48	1.62	.00	1.48

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

屈辱感の高低による影響は有意とならなかった ($B = -0.00$, $t = -0.10$, ns)。

「態度維持」を基準変数とした分析 「態度維持」については、シナリオと罪悪感の主効果が有意、性別の主効果が有意傾向であった。 R^2 の変化量については、内的帰属と屈辱感の交互作用が有意となった。交互作用の性質を検討するために、平均±1SDの値を外的帰属と屈辱感に代入した結果をFigure 5に示す。Simple Slope Analysisを行い検討した結果、内的帰属が高い場合は屈辱感の高低による影響は有意とならなかったが ($B = 0.04$, $t = 0.35$, ns)、内的帰属が低い場合は、屈辱感の高低による影響は有意となった ($B = -0.24$, $t = -2.44$, $p < .05$)。

「自己向上」を基準変数とした分析 「自己向上」については、性別、罪悪感、屈辱感、内的帰属の主効果が有意であった。 R^2 の変化量については、内的帰属と屈辱感の交互作用が有意となった。交互作用の性質を検討するために、平均±1SDの値を内的帰属と屈辱感に代入した結果をFigure 6に示す。また、Simple Slope Analysisを行い検討した結果、内的帰属が高い場合は屈辱感の高低による影響は有意とならなかったが ($B = 0.06$, $t = 0.76$, ns)、内的帰属が低い場合は、屈辱感の高

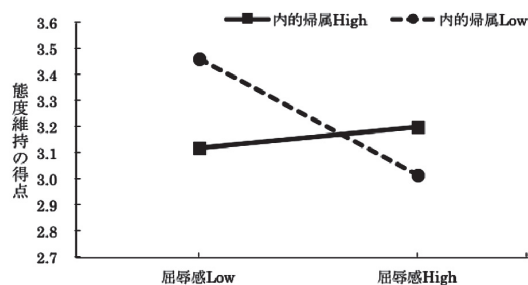


Figure 5 「態度維持」における内的帰属と屈辱感の交互作用

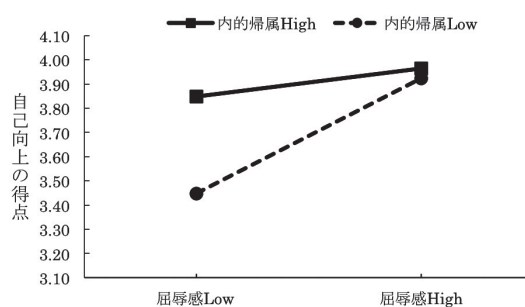


Figure 6 「自己向上」における内的帰属と屈辱感の交互作用

低による影響は有意となった ($B = 0.26$, $t = 3.91$, $p < .01$)。

「学業意欲低下」を基準変数とした分析 「学業意欲低下」については、屈辱感、外的帰属の有意

な主効果が示されたが、有意な R^2 の変化量は認められなかった。

考 察

本研究では、屈辱感が社会適応的行動を促進させるための調整変数を検討することを目的とし、調整変数として、自己効力感、LOC、達成動機、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求、自尊感情、原因帰属を取り上げて検討を行った。以下では、自己意識的感情と調整変数の検討に関する結果を中心に考察する。

シナリオによる自己意識的感情の差異

シナリオ間による自己意識的感情の差異については、僅差場面よりも大差場面の方が、屈辱感、羞恥感、罪悪感が有意に高く喚起されていた。この屈辱感についての結果は、Kerr et al. (2005) と一致した。僅差で劣位に置かれるという事態は、優位者と劣位者との間にほとんど実力差はないが、大差で劣位に置かれるということは、両者の実力はかけ離れていることを意味する。つまり、自己の劣位をより強く意識させられるほど、屈辱感が生じると考えられる。また、羞恥感と罪悪感についてだが、両者の実力がかけ離れた状況は、自身の能力の低さを露呈するため、他者から受ける否定的評価への懸念を強める。菅原 (2004) によると、羞恥感はその状況で適切な行動をとっているかどうかを警告する機能を持つという。他者からの否定的評価は、その状況での自身の不適切さを意味するため、羞恥感が高まったのだと考えられる。さらに、セルフ・ディスクレパンシー理論 (Higgins, 1987) によると、現実自己と義務自己との不一致が生じた場合に罪悪感が生起するという。能力の低さを露呈するという状況において、あるべき自己像とのズレが生じたため、罪悪感が高まった可能性が考えられる。

調整変数の検討

シナリオ提示後の心理的反応に関する因子分析の結果、「妨害」「態度維持」「自己向上」「学業意欲低下」の4つの因子が抽出された。これらの因子の内、「自己向上」がその因子内容から、本研

究で着目する社会的に受容される形で、将来的に自己を向上させる行動に相当した。本研究は、屈辱感が社会適応的行動を促進させるための調整変数を検討することを目的としていることから、調整変数に関する考察では「自己向上」に関する結果を中心に述べる。

1. 自己意識的感情の主効果について

階層的重回帰分析において、羞恥感の有意な主効果は得られなかったが、罪悪感と屈辱感の有意な主効果が示された。罪悪感の有意な主効果は、「態度維持」と「自己向上」を基準変数とした大半の分析において、また「妨害」を基準変数とした全ての分析において示された。つまり、罪悪感の高さは「態度維持」を低下させ、「自己向上」を高め、「妨害」を促進するという結果が得られた。Tracy & Robins (2004) は、努力のような内的で変化させることが可能な自己の特定の側面に帰属すると罪悪感が生じると論じている。この知見から、劣位に置かれた者が努力に帰属することで罪悪感が生起し、将来的に自己の地位を向上させようとする行動が促されるといえよう。一方で、罪悪感とは他者のパフォーマンスを低下させようとする「妨害」を促進した。このような行動は、他者を害する行動であり、社会的に受容される行動とは言い難く、また、他者との関係性を悪化させる可能性が極めて高い。Tangney (1991, 1995) は罪悪感と共感性との間に正の相関関係があることを示しており、共感性が人間関係を円滑に進めるために役立つことから、罪悪感是对人関係に良好に働き、社会適応的感情であると論じている。しかし、本研究からは、罪悪感が対人関係を悪化させるよう働く可能性が示された。Baumeister, Stillwell, & Heatherton (1994) は、罪悪感是对人場面で、自己が他者を害する行動を取った際に、自身の行動に注意を向けさせ、良心の呵責、後悔の感覚が生じるので、謝罪や修復行動のような補償的、適応的な行動を促すと論じている。本研究で取り上げた場面は、対人場面ではなく、能力の優劣が露呈するという自己の遂行能力が問われる場面であった。非対人場面で喚起された罪悪感が社会不適応的に働く可能性が示唆されたといえよう。

屈辱感の有意な主効果が、「学業意欲低下」を基準変数とした全ての分析において示され、屈辱感の高さは、学業意欲を低下させることが見出された。薊 (2006) は屈辱感を感じるほど、自己が置かれている状況からの逃避が生じやすいことを示している。薊 (2006) と本研究の結果から、屈辱感が高まると自己が直面している状況に対処するという動機が低下すると考えられる。

2. 調整変数について

「妨害」を基準変数とした分析において、外的帰属と屈辱感の有意な交互作用から、外的帰属が高い場合に、屈辱感が高まると「妨害」が促進されることが示された。“相手に対して何等かの危害を与えることを意図した行動” (秦, 1990) が攻撃であり、「妨害」は他者のパフォーマンスを故意に阻害する行動であることから、攻撃行動の一形態といえる。この結果は、屈辱感が他者に対する攻撃を促すという知見 (Gilbert & McGuire, 1998) と一致したといえる。

「態度維持」を基準変数とした分析においては、競争的達成動機と屈辱感の交互作用が有意傾向であったため、Simple Slope Analysis の検討を行ったものの屈辱感の有意な影響は示されなかった。内的帰属と屈辱感の有意な交互作用については後述する。

「学業意欲低下」を基準変数とした分析において、LOC と屈辱感の有意な交互作用から、LOC が低いほど、屈辱感の「学業意欲低下」に対する影響が強いという結果が得られ、LOC が低い者ほど屈辱感が高まると学業意欲が低下した。一方、LOC が高い者は屈辱感が高まっても学業意欲は低下しなかった。しかし、「自己向上」を基準変数とした分析において、LOC と屈辱感の有意な交互作用は得られなかったことから、LOC の高い者が屈辱感を感じることで、自己が置かれた状況を改善しようと動機づけられるという結果は得られなかった。

本研究の目的と最も関連する「自己向上」を基準変数とした分析において、賞賛獲得欲求と屈辱感の有意な交互作用から、賞賛獲得欲求が低いほど、屈辱感の「自己向上」に対する影響は強いと

いう結果が示され、賞賛獲得欲求が低い者が屈辱感を強く感じると自己を向上させる行動が促された。賞賛獲得欲求が高い者は、否定的評価を受けると屈辱感を感じやすいことが示されていることから (薊, 2008)、賞賛獲得欲求が高い者は他者からの低い評価に敏感に反応すると考えられる。しかし、賞賛獲得欲求の有意な主効果が得られなかったことから、賞賛獲得欲求の高さが自己向上を高めるよう影響を及ぼすという結果は得られず、また、賞賛獲得欲求が高い者において、屈辱感の高低による自己向上への影響は示されなかった。一方、賞賛獲得欲求が低い人間、言い換えれば、他者からの肯定的評価に関心を示さない者が屈辱感を感じるほど、競争心が芽生え、努力などの自己の向上が促された。この賞賛獲得欲求の低い者に示された結果に関して、2つの解釈が考えられる。まず1つ目に、普段は肯定的評価に関心はないが、自己が劣位に置かれたことによって肯定的評価への関心が高められるという可能性である。そのような状態で屈辱感を強く感じるほど、劣位に置かれた立場を改善しようと動機づけられるのかもしれない。2つ目に、他者から肯定的評価を獲得できれば社会からより多くの資源を獲得できるため (菅原, 2004)、他者からの肯定的評価を得ることを目標とした自己向上は外発的動機づけによるものといえるが、賞賛獲得欲求の低い者は、他者からの肯定的評価を欲しない。つまり、屈辱感を感じることによって、他者からの肯定的評価のためでなく、謂わば内発的動機づけが高まり、低下した自己の地位を高めようという行動が動機づけられる可能性が考えられる。

「態度維持」と「自己向上」を基準変数とした分析において、内的帰属と屈辱感の有意な交互作用が示されたことから、内的帰属が低いほど、屈辱感の「態度維持」と「自己向上」に対する影響は強いことが示された。具体的には、内的帰属が低い場合に、屈辱感が高まると「態度維持」の得点が低下し、「自己向上」の得点が高まった。「自己向上」を基準変数とした分析において、内的帰属の有意な主効果から、内的帰属が高まると「自己向上」が促進されるという結果が得られたこと

は、内的帰属の高さが達成行動を促進するという知見 (Weiner, 1971) と整合する。しかし、屈辱感が生起して自己向上に励む者は、内的帰属が高い者ではなく内的帰属が低い者であった。内的帰属が低い者は屈辱感が高まると自己向上に励むという結果について、次の解釈が考えられる。本研究の内的帰属が低い者とは、その因子の内容から、自身の努力不足が原因と認識しない者である。他者が自己よりも優れたパフォーマンスを示した場合、自身の努力不足に原因を帰属しないものの、屈辱感を感じるほど、他者と自分とのパフォーマンスの差に関する認識を強め、優れた他者に牽引される形で、自己向上が促されるのかもしれない。

以上より、優劣が示される場面において、屈辱感が自己向上を動機づけるよう導く調整変数として、賞賛獲得欲求と内的帰属が見出された。

本研究の限界と今後の課題

最後に、本研究の今後の課題について述べる。本研究では、大学生にとって想起しやすいゼミのレポートの評価という場面を設定した。今回得られた結果は、特定の場面に限定されたものである可能性は否定できない。加えて、今回扱ったゼミのレポートの評価が、回答者にとって、どの程度重要な意味を有するものであるかについては不明である。例えば、同じ勉強場面でも、受験のようなライフイベントと比較すると、ゼミのレポート評価の重要性は低く、また、その後の人生に及ぼす影響という点で質的に異なる。ゆえに、ライフイベントのような、人生にとって、より重要な意味を有する場面や、勉強場面以外についても検討するべきである。

引用文献

- 安達智子 (2016) . 自己効力—私の能力はどの程度?— 中間玲子 (編) 自尊感情の心理学 理解を深める「取扱説明書」(pp.50-60) 金子書房
- Aiken, L. S., & West, S. G. (1991) . *Multiple regression: Testing and interpreting interactions*. Newbury Park, CA: Sage.
- 薊理津子 (2006) . 恥と罪悪感の機能の検討—Tangney の shame, guilt 理論を基に—. 聖心女子大学大学院論集, 28, 77-96.
- 薊理津子 (2008) . 自己愛と屈辱感, 羞恥感, 罪悪感との関係性. 日本パーソナリティ心理学会第 17 回大会発表論文集, 70-71.
- 薊理津子 (2008) . 大学生における屈辱感が喚起される状況. 聖心女子大学大学院論集, 30, 115-129.
- 薊理津子 (2009) . 屈辱感・羞恥感・罪悪感の状態尺度と、恥, 罪悪感の特性尺度との関連性の検討. 聖心女子大学大学院論集, 31, 95-108.
- 薊理津子 (2010) . 屈辱感, 羞恥感, 罪悪感の喚起要因としての他者の特徴. パーソナリティ研究, 18, 85-95.
- Bandura, A. (1977) . Self - efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191 - 215.
- Bandura, A. (Ed.) (1995) . *Self-efficacy in changing societies*. New York Cambridge University Press.
- Baumeister, R. F., Stillwell, A. M., & Heatherton, T. F. (1994) . Guilt: An interpersonal approach. *Psychological Bulletin*, 115, 243-267.
- Breugelmans, S. M. & Poortinga, Y. H. (2006) . Emotion without a word: Shame and guilt among Rarámuri Indians and rural Javanese. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 1111-1122.
- Carver, C.S. & Schier, M.F. (1981) . *Attention and self-regulation: A control theory approach to human behavior*. New York: Springer-Verlag.
- Cohen, J., & Cohen, P. (1983) . *Applied multiple regression/correlation analysis for the behavioral sciences*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Elison, J., & Harter, S. (2007) . Humiliation: Causes, correlates, and consequences. In J. L. Tracy, R. W. Robins, & J. P. Tangney (Eds.) . *The self-conscious emotions: Theory and research*. New York: Guilford Press. Pp.310-329.
- Fessler, D. M. T. (2007) . From appeasement to conformity: evolutionary and cultural perspectives on shame, competition, and cooperation. In J.L. Tracy, R.W. Robins, & J. P. Tangney (Eds.) . *The Self-Conscious Emotions: Theory and Research*. New York: Guilford Press. Pp.174-193.
- Gibert, P., & McGuire, M. T. (1998) . Shame, status, and social roles: Psychology and evolution. In P. Gilbert & B. Andrews (Eds.) . *Shame: Interpersonal behavior, psychopathology, and culture*. New York: Oxford University Press. pp. 99-125.
- Hareli, S. & Hess, U. (2008) . The Role of Causal Attribution in Hurt Feelings and Related Social Emotions Elicited in Reaction to Other's Feedback about Failure. *Cognition & Emotion*, 22, 862-880.
- 秦一士 (1990) . 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究, 61, 227-234.
- Higgins, E. T. (1987) . Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.
- 堀野緑 (1987) . 達成動機の構成因子の分析—達成動機概念の再検討 教育心理学研究, 35, 148-154.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 (1982) . Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307.
- Kerr, J.H., Wilson, G.V., Bowling, A.C., & Sheahan, J.P. (2005) . Game outcome and elite Japanese women's field hockey player's experience of emotions and

- stress. *Psychology of Sport and Exercise*, 6, 251-263.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003) . 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11, 86-98.
- Murray, E. J., (1964) . *Motivation and emotion*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall.
(八木晃 (訳) 情緒と動機 岩波書店)
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995) . 特性的自己効力感尺度の検討－生涯発達の利用の可能性を探る－教育心理学研究, 43, 306-314.
- Rosenberg, M. (1965) . *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press
- Rotter, J. B. (1966) . Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monograph*, 80, 1-28.
- Sherer, M., Maddux, J. E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R. W. (1982) . The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, 51, 663 - 671.
- 菅原健介 (編) (2004) . ひとの目に映る自己－「印象管理」の心理学入門－金子書房
- 田中充 (2017) . 王子谷 連覇で初代表「最高です」リオ逃した屈辱バネ 産経新聞東京朝刊 4月30日
- Tangney, J. P. (1991) . Moral affect: The good, the bad, and the ugly. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 598-607.
- Tangney, J. P. (1995) . Shame and guilt in interpersonal relationships. In J. P. Tangney & K. W. Fisher (Eds.) , *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. (pp.114-139.) . New York: Guilford Press.
- Tracy, J. L., & Robins, R. W. (2004) . Putting the self into self-conscious emotions: A theoretical model. *Psychological Inquiry*, 15, 103-125.
- Tracy, J. L., & Robins, R. W. (2007) . Self-conscious emotions: Where self and emotion meet. In C. Sedikides & S. Spence (Eds.) , *The self in social psychology. Frontiers of social psychology series* (pp. 187-209) . New York: Psychology Press.
- Weiner B. (1986) . *An attributional theory of motivation and emotion*. New York: Springer - Verlag.
- Weiner, B. (2006) . *Social motivation, justice, and the moral emotion: an attributional approach*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
(ワイナー, B. 速水敏彦・唐沢かおり (監訳) (2007) . 社会的動機づけの心理学－他者を裁く心と道徳的感情－北大路書房)
- Weiner B., Frieze, I.H., Kukla, A., Reed, L., Rest, S., & Rosenbaum, R. M. (1971) . *Perceiving the causes of success and failure*. Morristown, NJ: General Learning Press.
- 山本眞理子・松井豊・山成由紀子 (1982) . 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

Driven by a sense of humiliation:

—An exploratory study using self-efficacy, praise seeking and rejection avoidance needs, achievement motivation, locus of control, self-esteem, and causal attribution—

Ritsuko Azumi *

Abstract

This study aims to examine how a sense of humiliation works in a socially-adjustable fashion, i.e., how it induces self-enhancing behaviors. As moderator variables, we selected self-efficacy, Locus of Control (LOC), achievement motivation, praise seeking need, rejection avoidance need, self-esteem, and causal attribution. Based on previous research, our study focuses on a situation where the self is placed in a position inferior to other people. We presented 333 participants (mean age=19.79) with a vignette, wherein we set up the evaluation of a seminar report- a situation with which university students are familiar. The results showed an increase in sense of humiliation in individuals with low praise seeking need prompted actions and behaviors designed to enhance one' s self. Further, a rise in the sense of humiliation in individuals with low-level internal attribution prompted actions and behaviors designed to enhance his or her self. Therefore, in situations where the self is put in a position inferior to others, both, a praise seeking need and internal attribution were detected, with sense of humiliation serving as motivator for the person to enhance the self.

Keywords : humiliation, self-efficacy, praise seeking and rejection avoidance needs, achievement motivation, locus of control, self-esteem, causal attribution
